様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００３５３

研究課題名（和文）明治前期における新聞に付随する書籍・印刷物の研究

研究課題名（英文）Research on publications accompanying newspapers in the early Meiji period

研究代表者
中丸　宣明（Nakamaru, Nobuaki）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：８０１９８１８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：明治前期の新聞販売の過程の中で、新聞の呼び売りをになう業務から新聞に附属する出版物の出版を手がけることとなった書籍行商社（後に日本館と改名）の出版活動の実態を実証的に解明（出版書目および書誌情報の収集、データーベース化）した。そしてそれらの出版物が明治期の「小新聞」が「中新聞」化（日清戦後成長した「市民層」向けのクオリティーペーパー化）するさい、切り捨てた「小新聞」的なるものであった。それらは暦などの日常の生活情報であったり、ゴシップ的ニュースであったり、通俗的読み物であったり、詩歌の投稿欄であったりしたわけであるが、それらは江戸期の草双紙的読み物の伝統を受け継ぐものであることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は江戸幕末期の所謂戯作文学が、どのように明治期の文学に受け継がれたかを明らかにした。明治期になると新しい出来事を伝える新聞が発達するが、卑近な日常の情報の提供を担った「小新聞」の担い手には江戸期の戯作者たちが当たることになる。彼らは巷のニュースや新時代の情報などを面白おかしく報道するが、その手法は江戸期の合巻や人情本の伝統を受け継ぐものであった。しかし、新聞が「近代化」する過程でそれらの要素は新聞から切り離され、新聞周縁の出版物へと分離する。その版元の代表が日本館であった。それらの出版物２０世紀に入る頃には、講談・落語の速記本の流れと合流し「大衆文学」の源流となる、という筋道を解明した。

研究成果の概要（英文）：This study empirically clarified the actual publishing activities of a book peddler company (later renamed Nippon-kan) that, during the process of newspaper sales in the early Meiji period, changed its business from simply selling newspapers to publishing publications related to newspapers (collecting publication catalogues and bibliographic information and creating a database).These publications were the kind of "small newspapers" that were discarded when the "small newspapers" of the Meiji period became "medium-sized newspapers" (quality papers aimed at the "citizen class" that grew after the Sino-Japanese War). They contained information about daily life such as calendars, gossip news, popular reading material, and poetry submission columns, and I have made clear that they inherited the tradition of kusazoshi-style reading material from the Edo period.

研究分野：日本近代文学

キーワード：草双紙　１９世紀文学　小新聞　書籍行商社　唄本

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

日本の近代文学の形成は、明治以降の西洋文学・文化との関係で捉えられることが多く。江戸期から連続する文学的伝統との関係への考察が希薄であった。坪内逍遙の「小説神髄」（1885 年（明治 18 年）9 月から 1886 年（明治 19 年）4 月）における、江戸期の勧善懲悪を中心にした「読本」の否定と「模写」主義が、近世期の文学と明治期の文学を断絶したという、文学史観そのものの皮相性に関しては、かねてから疑問が呈されていた。柳田泉・興津要・前田愛などと言った開拓者的研究のあと、本研究が記とされる前後、近代文学研究の分野でも近世文学研究の分野でも新しい研究の動向が起こってきた。国文学研究資料館における「開化期戯作の社会史研究」（２００４年～２００９年）は日本近代文学研究のエポックをなすものであった。それは日本文学研究史において空白部分を多く残す幕末・明治開化期文学に照明を当て、新たな研究動向を開拓する試みであったが、とくに成果を挙げた研究が、幕末維新期の戯作界の雄と目される仮名垣魯文の研究であった。それまでの限られた資料にもとづく研究に対し、全国の魯文の著作や資料を博捜した実証的研究、および作品の精緻な読みは新しい研究の分野とあり方を開示した。それ以後、その研究に参加した人々、及びその研究に影響を受けた人々によって、幕末維新期あるいは１９世紀文学研究が新局面を開くことになった。

２．研究の目的

江戸期からの文学伝統との連続を、具体的出版活動の実態調査をすることによって明らかにする。この目的をささえるさらなる大きな目的としては、二点考えられる。

最初の点は、日本の近代社会・近代文学そのものの成立に対する考え方のこれまでの史観への疑問である。その史観は日本の近代は、遅れた古い江戸時代から脱皮すること、西洋化を進めることによって新しく強い国になったとするもので、またその文学も西洋文学に学んだものだったとするものである。しかし、わずか十年や二十年で全く新しい社会や文学が作られることが可能なのだろうか。西洋を受け入れる素地がなければならないはずであろう。表面的な西洋化や西洋文学の移入に注目する論は本質を見ていないものである、と考え、江戸期からの連続をあとづけ、明治以降の近代化を相対化することを大きな目的のひとつとした。

今ひとつの、おおきな目的は、文学における大衆文学と純文学という区分付けの再検討である。二葉亭四迷・坪内逍遙にはじまり、漱石・鷗外、自然主義作家、白樺派といった作家作品が整理されている、一般の近代文学史は、言ってみれば純文学の文学史なのである。しかし、それらの作品はどれぐらいの「国民」が享受したのだろうか。明治以来、とくに高等教育を受けたわけでもなく、普通に暮らす「庶民」たちの娯楽に供した文学があったはずである。それは純文学の読者数を遙かに上回る人数がいたとかんがえられる。大正期に「大衆文学」名指させる一群の文学である。近代文学における「大衆文学」に対する差別を見直し、是非考え直さなければならない。明治から大正期に至る文学の流れの中で、それはどんな形成過程をたどったのか。結論からいえば、講談・落語の速記本、と明治三十年代の「家庭小説」の流れなのである。その流れがどこから来たのか、それを探るのが、本研究の目的である。当然その目的意識のなかには、江戸期の「庶民文学」であるところの戯作からの連続性が意識されているのだが、より巨視的にはそういった庶民の基底に流れる文学あり方が、純文学を規定したことへの着目がある。つまり「大衆文学」へのメタ機能としての「純文学」というあり方をあきらかにする、という目的があった（この件に関しては拙著『物語を紡ぐ女たち–自然主義小説の生成』（２０２２．２）において自然主義文学に即して論じている）。

３．研究の方法

新聞の販売に関わり、新聞に付随する出版物を発行した書籍行商社（後の日本館）の出版活動の実態調査を中心にし、同種の出版社、例えば有喜世館などの活動をも明らかにする。また「赤本」と呼ばれる非正規流通本や再販本（単純に安価・粗悪な書籍を意味することも多い）も調査の対象とした。これらの「赤本」は上記出版社と近縁関係にあったと思われる。

これらの書籍は、保存するもの、愛蔵するものといったものではなく、読み捨てされるものであり、残存率が悪く、公共の図書館や大学にもほとんど架蔵されていない。そのなか、例えば会津若松市立図書館や酒田市立光丘文庫など戦災震災を免れた、図書館等の調査によって遂行しようと考えたが、おりからのコロナ禍により調査は非常なる困難に直面した。そこでやむを得ず国会図書館蔵書と古書市場から入手した資料により調査を継続した。古書市場の人脈を通して貴重資料の入手が出来たこと、そしておりからの諸図書館等のデジタル化が利用できたことは幸いであった。

具体的な内容は、出版物の内容の江戸期戯作から明治期戯作、新聞周辺出版物（書籍行商社の出版物を中心に）等質性と変遷の調査を基礎とした。

４．研究成果

江戸期の戯作は、明治初期の合巻ないし実録に受け継がれ、明治期の小新聞（政論中心の大新

聞に対して庶民的な記事を多く載せた）の雑録や雑報に受け継がれ、新聞の高級化（日清戦後の年市民階級に即応した）にともない、新聞から切り離され新聞流通と近い出版社による安価な出版物として流通するようになり。さらにその出版物は、日露戦後の時期、講談・落語の速記本という通俗的読み物と合流し、大正期の大衆文学の源流の一つとなった、ことを明らかにした。

具体的には、明治前期の新聞販売の過程の中で、新聞の呼び売りをになう業務から新聞に附属するす出版物の出版を手がけることとなった書籍行商社（後に日本館と改名）の出版活動の実態を実証的に解明（出版書目および書誌情報の収集、データーベース化）した。そしてそれらの出版物が明治期の「小新聞」が「中新聞」化（日清戦後成長した「市民層」向けのクオリティーペーパー化）するさい、切り捨てた「小新聞」的なるものであった。それらは暦などの日常の生活情報であったり、ゴシップ的ニュースであったり、通俗的読み物であったり、詩歌の投稿欄であったりしたわけであるが、それらは江戸期の草双紙的読み物の伝統を受け継ぐものであることを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 中丸宣明	４．巻 18号
２．論文標題 「唄本」論ノートー「唄本」のなかの文学	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本近代文学館年誌	６．最初と最後の頁 16-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中丸宣明	４．巻 98-4
２．論文標題 「家」論ー物語を紡ぐ女たち	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国語と国文学	６．最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中丸宣明
２．発表標題 明治の草双紙屋
３．学会等名 一九世紀文学研究会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 中丸宣明	４．発行年 2022年
２．出版社 翰林書房	５．総ページ数 335
３．書名 物語を紡ぐ女たち ： 自然主義小説の生成	

１．著者名 中丸宣明・小林ふみ子	４．発行年 2020年
２．出版社 文学通信	５．総ページ数 270
３．書名 好古趣味の歴史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関